

白縮緬地石畳に賀茂競馬文様友禪染小袖

丈一二七・〇纏

桁六五・五纏

江戸時代

京都国立博物館蔵

この小袖(口絵2)は京都市賀茂神社の五月五日の行事、競馬くまうまと
りあげて意匠としたもので、意匠・施工ともに従来から友禪染の名
品として注目され、図録に掲載されることも多く、また展覧会にも
出陳されて一般には周知の一領である。今回、この小袖について検
討を加え、少々の私見を述べたい。

意匠

縮緬地を用いたやや小型の小袖注1。一領は上下の文様替りとした二
部構成の意匠で、背面では肩・両袖にかけて斜の石畳をあらわし、
腰下から裾におよんで二騎が競うところを大きくとらえる。右上方
の袖裾から楓が枝を伸し、その間に埒を結う。埒を馳け抜ける二騎
は、見返りつつ先行するのは芦毛、勢いこんで追うのは褐色の駒で
いずれも三繫さんがいを美々しく飾り、虎皮の泥障をかけ、騎者は故実こじつにの
つとつて、細纓の冠に老懸を懸け二葉葵をかざり、裨褙、接腰、指
貫、虎の生皮で鞆を覆った大刀、執鞭の姿にあらわされている。こ

の二騎をささむように配された楓は、むしろ葉を逆立るように表現
し、この競いあう馬の馳ける速さや巻き起る風、見所の人々の初夏
の陽光にあおられた興奮や熱気のみなぎりなどを巧妙にあらわす。
手前の埒の下方は矢来を組む。前面は背面から連なって上半身は斜
石畳を、下半身は楓と埒の一部を上前にのぞかせ、矢来を下前にあ
らわす。小型の一領であるが、斜石畳と楓・競馬が対照的で、一領
全体におけるそれぞれの割合いもほどよく釣合いがとれ、幾何学的
図形と具象的な図様、単一の色彩と複雑にこみ入った配色との対比
など、幾層にも重なる魅力をそなえている。

技術

斜石畳は細やかな針目をしめす縫い絞りで紅染。楓および騎手と
駒は友禪染で、きわめて細く斉一な美しさを見せる糊糸目に注目さ
れる。糸目は単に防染の手段である域を脱して、馬のたてがみや尾
(挿図1)三繫などのなびく毛や総をあらわし、先行する騎手の袴には
糸目による白揚げの水割れ文様が効果的である。

友禪染による挿色は黒・藍・臙脂・紫・萌葱・茶・濃茶・黄・金
茶などにより、多彩を用いながら決して煩わしくならない華麗な調
和に魅了される。また細やかな色挿し部分では友禪染の特色である
暈しによる処理は比較的ひかえ目で、いわゆる塗り切りが多く、暈
しは楓葉・鞍結びの房・裨褙文様のうちの菊花などに見られる。さ
らに白揚げのままとされた桜・菊・花菱などの装束文様は、きわめ
て鋭く冴えた筆緻のベンガラ色細線で描き起こす。また特色がある
のは両馬の泥障の部分で、虎皮をあらわす黄地に毛筋をしめす糸目

を白く浮かせ、さらに虎斑の意味で墨隈を波状に添えて墨点を打つ(挿図2)。

騎手の顔は全くの描絵による処理で、淡墨の細線で輪郭し、肩が太く眼の大きい特色のある顔を描く(挿図3・4)。

楓葉は臙脂・萌葱の暈し合わせが目をはき、特に臙脂・濃藍・金茶・金茶に臙脂暈しと多色を挿し分けて、濃藍の点描を加えた、いわゆる加賀調^{注3}と従来からよびならわされている処理が注目される(挿図5)。

矢来は全くの白揚げで、地の部分を淡藍として浮き立たせる。

刺繍は、意匠の中心となる騎馬の部分には一切加えられず、楓葉(挿図5)と矢来の交点部分を結ぶ緒に見られる。色系は友禪染に補助的に加えられる刺繍の常として紅と金^{注4}で、さらに白濃茶糸が葉や矢来の結緒に用いられている。色系はいずれも平糸で楓は割り繻、緒は大手なまつい繻。

なお一領の色彩で特に注目されるのは騎手の袴裾や履、鏡、楓の幹に挿された黒色である。これは糊糸目の繊細な白色とともに、多彩華麗な意匠を煩雑と感ぜさせない、色彩上の引き締め役にあたっていると考えられるが、黒系色の通例として染料による繊維の損傷が全く見られないのである。墨による場合も時にこのような事例を見出すことが出来るが、この小袖の場合は墨とは異なる厚味のある光沢が認められる。あわせて注目されるのは両騎手の頭髮の表現である(挿図3・4)。いずれも不思議な施工になる。この部分の経糸は全く欠失し緯糸のみが残存する。拡大鏡下に見れば緯糸には墨が点々と残り、本来この頭髮部には墨が塗られていたことと推察される。ところが後に墨膠によって損じ、経糸が脱落したのであろうか。あ

るいは当初から意図的にこの特殊な施工によつたと考えるべきであろうか。現状では裏から黒色の縮緬が当てられ、縮緬はさらに別裂で覆われている。

白地に紅の斜石畳が明るく映え、対照的な細やかさを見せて競馬部分が濃密な華やかさを盛りあげるこの小袖は、従来の評価どおり江戸時代の友禪資料中、屈指の一領と考えられる。しかしさらにこの小袖を細く観察すると次のような点に気づく。友禪染の名品・名作とするにはいささかの変りはないものの評価の色合いの異なることが指摘されるのである。

検 討

1 この一領の寸法が異様で、特に身幅に比して身丈が短く、衽は極端に幅狭である。^{注5}

2 各所に裂のはぎ目がある。両肩山。後身では肩山から追走する騎手の冠上辺まで、背縫を中心に□型にはぎ合す(挿図6)。襟山、両襟に二ヶ所など。

3 文様は縫目をまたがって連続する、いわゆる絵羽づけとされているが、大部分は後に補なわれたものと考えられる。

4 本来の部分は背の□型部を除いた背の全面。大小四片に分れた前襟などで、後補は両袖、背の□型部、両前身(身頃・衽)、襟山部分。

などの諸点があげられ、当初の部分はきわめて限られていることが知られるのである。

次に当初の部分(イ)と後補の部分(ロ)との比較を試みよう。

○生地

イ縮緬。糸質は上手で光沢が美しく、糸の密度は一糎の間に経約五八本、緯約三〇越。柔らかく軽やか。経にシケや皺むらがあるものの平滑な風合いをしめす。

ロ縮緬。光沢にとぼしい。糸の密度は一糎の間に経約五八本、緯約二五越。緯は太く撚りが強くかかっている。厚手で重々しい風合いで細く平均的な皺が見られ、この特色は近代の縮緬に見られるところである。

○石畳

イ紅縫絞染。縦方向の各角は上下を接し、左右では約五耗の空隙がある。一単位は約六・〇×六・七糎。紅色は明るい暖さをしめし冴えている(挿図7)。

ロ絞染ではなく、すべて染分けにより、縁部に加筆があり形を正している。一単位はほぼ七・二×六・三糎。ただし部分によって大小がある。イとは異って縦横共に角を接し、時に重っているものさえある。紅は一抹の暗さを含み、重さを感じさせる。

○友禅染(特に楓の部分)

イ糊糸目は細く冴えている。また色彩は植物性染料の特色を見せて彩度が高い(挿図5)。

ロ糊糸目は拙劣。色彩も重く濁っている(挿図8)。

○刺繍

イ平糸・金糸のいずれも時間とともに乱れた自然の趣が得られる(挿図5)。

ロ平糸・金糸は古式をよく写しているが、あえて作った意図的なものが感じられる。特に紅糸は褪色の状態を模して無理がある

(挿図8)。

以上のように観察され、繰り返えせば当初の小袖裂に加えて、近代になって現状のように修補して調えられたものと考えられる。

ところで、その当初の小袖はどのような姿及び意匠をしめしていたのであろうか。現状では斜石畳と競馬の目ざましい効果に感動されたのであるが、また他にも類似の小袖が伝存し、享保五年正月刊の『雛形菊の苗』には小立(小児の衣装)ながら斜の市松文様に唐兜散が見られる。したがってこの小袖はかなりの部分に後補がうかがわれるものの、当初の姿をほぼとどめていると考えたいところである。しかしいまいちど細部に注目すると、背面の□型新補の底辺を延長した左右の当初裂に、あたかも肩山か袖山に見るような、磨れ傷みがうかがえるのである(挿図6・9)。したがって□型を例えば羽織の前身の切り欠きと考え、右の磨れ痕を肩山として、その部分で前後に打ち返えされていたのではないかと考えられる。

しかし右のように考えるには不自然と思える点がないこともない。先ず、この目ざましい紅の斜石畳は前身のみのこととなる。次に羽織様に前側に襟がとりつけられるにしても、□型の襟肩開の部分が大きすぎると指摘されよう。また寸法上当然ながら矢来の部分はさらに裾に文様が足されなければならない。

これらの点とはかくとして、当初裂の斜石畳は縦横にみられるわずかの寸法の差によって、左身は右から左へ、また右身は左から右へ流れる二つの方向性が感じられる。現状では□型裂でそれを連続させるのであるが、かなりの無理がうかがえるようである。石畳を前身に返える部分と考え、ここに羽織様の襟がつけられたとすると、左右への流れは襟で断ち切られることとなって不都合はないと

いえよう。

ところで、最後になったが、この見事な友禅染の作期を何時と考
えればよいであろうか。

糊糸目のきわめて緻密な調子、斜石畳文様に縫絞染が用いられて
いること、楓葉などを繡う平糸が、厚く大手に処理されている、赤
味を漂よわせる金糸の風合い、騎手の顔容のあたかも享保雛を見る
ような表現などから、江戸時代中期の作例であることはいうまでも
ない。さらに享保九年（一七二四）八月刊のもの『当流雛形鶴の声』の
第百五十番に類似の文様が採用されているのを見ることができ
（挿図10）。雛形本と比較するのは無理ではあるが、さすがにこの友禅
染は生彩にとみ、華麗な雰囲気は享保期よりも溯ると考えられるの
である。

このように、この小袖にはおそらく近代と考えられる修補が加え
られている。その修補については従来ほとんど気づかれることなく
今日に至っており、友禅染・絞染・繡そして各部分のはぎ合せなど、
修補に見る技術は優れているのであるが、なお当初部分の作行には
及ばない。

修補部分を除けば、限られた断片という事になるが、友禅染資料
として注目すべき作例であるのには変りのないことを繰り返し強調
したい。
(切畑 健)

〈注〉

- 1 丈二七・〇糎、衿六五・五糎、衽幅九・八糎。
- 2 『競馬記』
左方

一冠 細纒 一老懸 一裋襦 赤地織紋花輪違、裏 一接腰 赤地 一缺
生絹綾、縁赤地金襴

掖 紅梅 一指貫 又奴袴トモ云、地萌葱色花輪違織紋黄、 一大帷子 地晒
精好 裏練龍紋萌葱色無紋 括紐綿糸操打 布白

一下帷子 地晒布 一下袴 地晒布色蘇芳 一大刀 銀作減金、虎ノ生 一鞭
白無レ袖 前後二ツアリ 毛、帶紫革 露金、

左子デ 一末広 蝙蝠 一糸鞋 亂緒
右子ジ

右方
一裋襦 身青地織 一接腰 金ヲ金ヲ 一缺掖 黒精好紅梅 一下袴 イロコ
紋花輪違

ゴニ 一大刀 金作減金、尻 其餘左方ニ同 蛭絵アリ

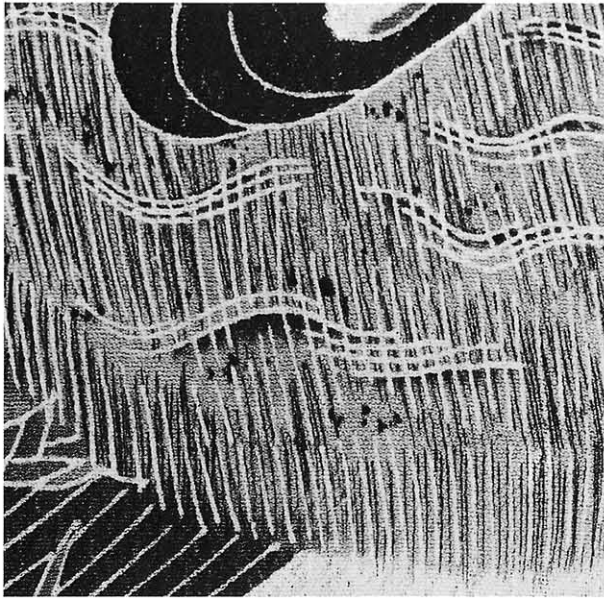
二色以上の色を挿し合せ、さらに黒や濃藍などを加えて、同色の点描
を添える特色のある表現(挿図5参照)は、加賀友禅の特色と考えられ
たが、これは江戸時代中期の友禅染一般の特色として、その地域性は
否定したい。

江戸時代中期のいわば初期友禅は、染による処理を中心とする。した
がって刺繡は本来不要の加工である。しかし補助的ではあるが、必ず
といってよいほど繡が加えられるのである。その場合、刺繡はほとん
どが紅と金であることに注目される。それは紅も金も友禅染では処理
不可能な色彩で、刺繡によらなければならぬ性格のものであること
による。このことはまた、青味を底にひそめた臘脂系の赤がふんだん
に友禅染に用いられているのに、その赤をあきたらなく思う色感の存
在をうかがわせる。すなわち、紅系の赤が黄を沈めて明るく、暖く、
なごやかで、金色とともに人々の強く求めた色彩であると察せられる
のである。

注1参照。

石畳に瀧鷹文様友禅染小袖(大阪・鐘紡株式会社蔵)

- 6
- 5



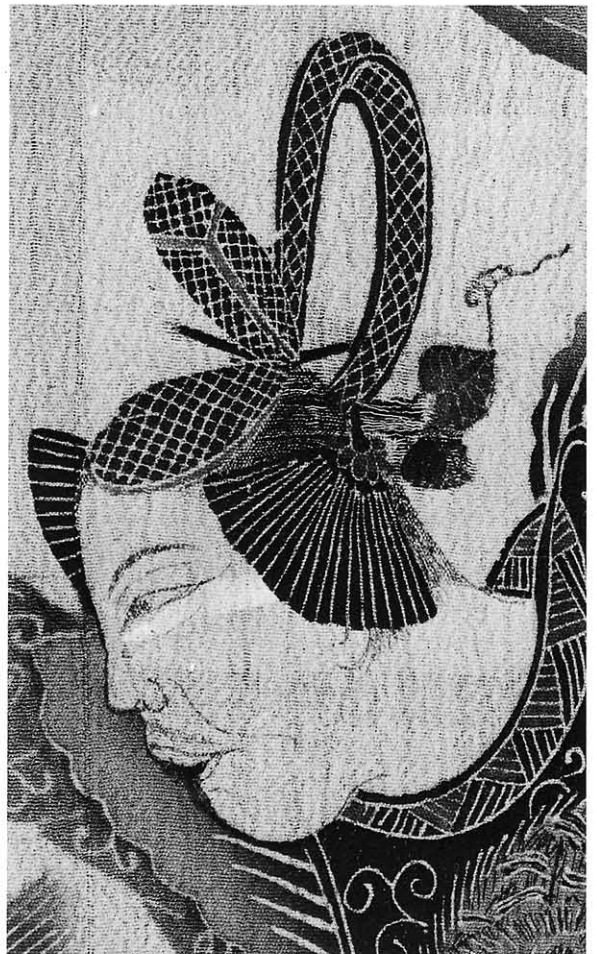
挿図2 泥障



挿図1 尾・尻繫部分



挿図4 騎手の顔



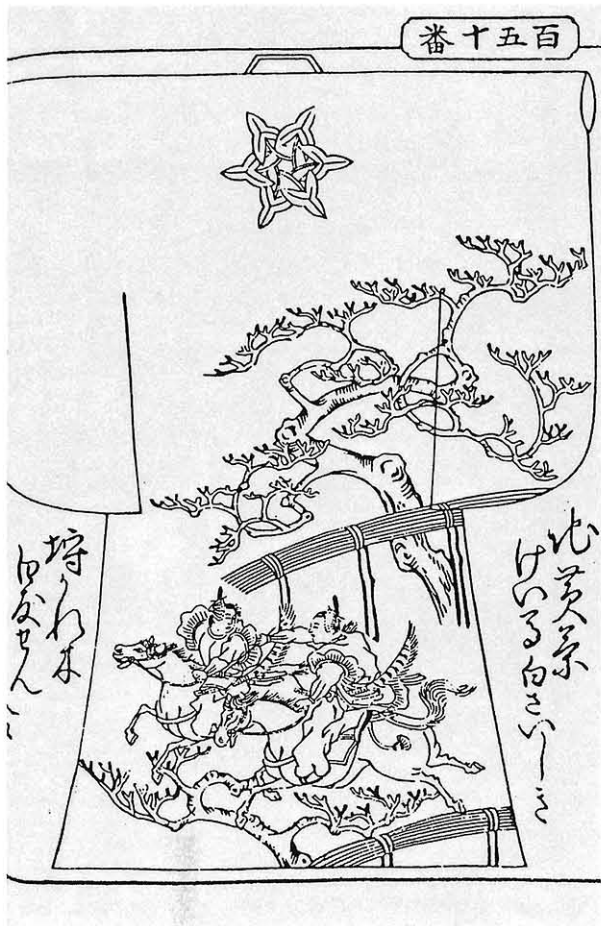
挿図3 騎手の顔



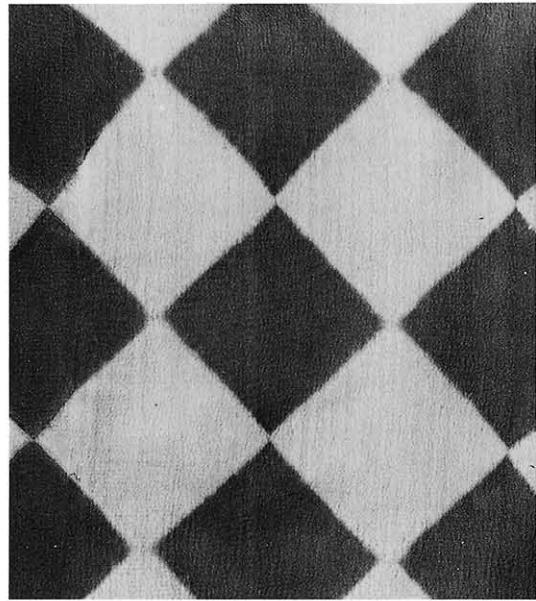
挿図5 楓葉（友禅染・刺繍）



挿図6 はぎ合せ（実線）と磨れ傷み（点線）



挿図10 『当流模様雛形鶴の声』



挿図7 絞染（中央部）と染分（左右端）



挿図8 楓葉（後補）



挿図9 磨れ傷みのある部分（右身頃）